

【卒業式式辞】(2025 年 2 月 15 日)

I. はじめに

ただいま卒業証書を授与された 61 回生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。またご列席いただきました保護者の皆様をはじめご来賓の皆様、まことにありがとうございます。

先ほど皆さんお一人お一人の目を見て高等学校の全課程を卒業された証としての卒業証書を授与しましたが、実に立派な姿でした。この卒業証書授与式を前に私は 61 回生全員と約束をしました。それは、今日はとにかく素晴らしい門出の日ですから、にこやかにこの階段を上がり、私の前にきたら胸を張って今までで最高の笑顔で卒業証書を受け取ることです。ここに集まった皆さんには証書を受け取る時の笑顔を見ていただくことができませんので、本日 61 回生全員はこの約束をしっかり守り、飛び切りの笑顔で卒業証書を受け取ったことを、まず、皆さんにご報告いたします。

II. 61 回生を総括すると

さて、61 回生はどんな学年だったでしょうか。まず、非常に誇り高き学年です。粘り強く忍耐力があって勝負強い学年でもあります。結果がすべてではないけれど、やるからには結果にこだわって努力する学年でした。また、笑ったり泣いたり、喜怒哀楽をしっかり出すことのできる人が多い学年です。いっぽうで思慮深い人も多く、自分の考えを自分の言葉で表現することができる学年でもあります。私が 2 学期に HR で話したことへのコメントや特別カリキュラムでの感想は短時間でよくここまで書けるなというほど豊かな表現力をもっています。その言葉には愛が込められていました。このように、61 回生は一人ひとりの個性が光った、まことにバランスの取れた学年でした。

校長室の前に「愛徳ボックス」を設置し、いつ何を書いてもよいメモを置いているのですが、統計的に 61 回生は、もっともコメントを書かない学年ということが出来ます。だからと言って私のしよとすることや、言っていることに無関心なのかというと、全く違い、むしろ逆です。例えば全校朝礼など私が何か話した後は、その感想やコメントを誰かが必ず直接私に話してくれます。「昨日のお話はお母さんも聞きたいと言っていたので校長ブログに書いてください」「私の名前もどんどん出してください」等よく言われました。また、毎週の名言もスルーしているのかなと思えば本当はいつもちゃんと読んでいるのです。名言についての感想も直接言ってくれる人が多いのですが、ある時は保護者からのメッセージをいただいたこともあります。その時は 17 世紀のフランスの数学者であり哲学者のパスカルの「徳の高さは人が何か特別にがんばった時に判断するべきではない。日頃の行いで判断するべきである」だったのですが、それをたまたまご覧になったお母様が自宅に帰って「今回は校長先生にコメントを書けそうじゃない？」と聞いたそうです。するとこのお嬢様は「名言は名言だけあって、それだけでぐうの音も出ないというか、ストンと心に落ちるんだよね。だから感想文はなかなか難しい。」と答えたそうです。それで代わりにお母様がお手紙を書いてくださったのですが、なんと素晴らしい感性と行動力でしょう。非常に心温まる話です。

ちなみにこの方は十数年前に愛徳学園のシスターからいただいたという「親の祈り」を今も冷蔵庫に貼って時々祈っておられるそうです。冷蔵庫に貼るとことはいつも目にすることができるということです。その祈りを少しだけ抜粋してご紹介したいと思います。

「神さま、もっと良いわたしにしてください。子どものことをよく聴いてやり、心の疑問に親切に答え、子どもをよく理解するわたしにしてください。

どうか 意地悪な気持ちを取り去ってください。わたしが間違ったときにはきちんとあやまる勇気を

与えてください。いつも穏やかな広い心をお与えください。子どもと一緒に成長させてください。

子どももわたしも神様によって生かされ、愛されていることを知り、他の人々の祝福となることができますように」

61 回生の皆さん、皆さんを育て、見守ってくださった保護者は、多少言葉は違ってもこういう祈りをいつも心の中で唱えてくださっているのです。いつかきっと皆さんもそのことがわかる日が来るでしょう。そして人のために生きるということ、人のために祈るということの尊さを知る人となるでしょう。

Ⅲ 贈ることば

61 回生の皆さん、皆さんの学年目標は言えますね。一つは今日の日を笑顔で迎えようというものですが、もう一つは「ノブレス・オブリージュ（長女の誇りと責任）」です。このノブレス・オブリージュは一般的には「高き身分の者に伴う義務」という意味のフランス語なのですが、皆さんはおそらく愛徳学園の最上級生として、愛徳生のあるべき姿を、行動することで妹たちに伝え、示そうとしたのだと私は解釈しています。

このことに関連して、実際にある大学の入学式で「ノブレス・オブリージュ」という言葉を使った人物がいますので少し引用させていただきます。

「受験戦争を勝ち抜いてこの大学に合格したこと自体が『ノブレス』の証でもなんでもないことは、言うまでもありません。新入生たちがまずなすべきことは、これからの時間を使って、『オブリージュ（義務を負わせる）』という動詞にふさわしい本物のノブレスになるべく努力することであり、彼らはその出発点に立ったに過ぎないのです。」

これは東京大学の第 20 代総長である歴史学者の林健太郎氏が 50 年ほど前に、東大の入学式で語った言葉なのですが、なかなか本質をついており、痛快です。これを本日卒業する皆さんに置き換えて、私は次のようにアレンジしたいと思います。

「卒業の日を笑顔で迎えられたこと自体が『ノブレス』の証でもなんでもないことは、言うまでもありません。卒業生の皆さんがまずなすべきことは、これからの時間を使って、『オブリージュ』という動詞にふさわしい本物のノブレスになるべく努力することであり、あなたたちは今、その出発点に立ったに過ぎないのです。」いかがでしょうか。

多様性がいっそう進む現代社会にあって、自分の責務をどのように見出していくかはまさに今現在の日本の課題であり、これからの社会を生きてゆく私たちにとって大人も子どもも常に自問しなければならない問いでしょう。この普遍的で絶対的な問いを学年目標に掲げた皆さんは、今日でその目標を達成したとかできなかったなどという単純な図式ではなく、その制服を脱いだ瞬間から、永遠にそのことの意味を考え、真の美しさ、美そのものを追及していかなければならないのではないのでしょうか。そういう意味で、ダイヤモンドの原石のような皆さんがこれからどのように成長していくのか、本当にわくわくしています。ぜひ再会の時がくることを楽しみにしています。少なくとも皆さんはそう感じさせてくれる学年でした。ですから、心から言います「ありがとう」。そして本当におめでとうございます。

V おわりに

最後になりましたが、本日ご列席いただきました保護者の皆様、これまでの愛徳学園の教育活動に多大なるご支援とご理解を賜りまして誠にありがとうございます。卒業したあとも愛徳ファミリーとして、我々教職員一同はいつまでもお嬢様のご成長とご活躍をお祈りいたします。本日はまことにありがとうございます。